

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】伊藤 千尋

【所属】(助成決定時)京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】生業の選択と実践のプロセスから見る現代アフリカ農村の「潜在能力」の変動

【研究の目的】

現在、アフリカの農民は、自給用農業だけでなく、非農業活動・都市への移動労働など複数の生業を組み合わせることで、不確実な自然・社会環境に対応している。生業活動の多様化は、リスク分散や貧困削減につながるとして、アフリカ農村研究だけでなく開発・援助の文脈でも注目されてきた。その一方で、生業が多様化していく過程、また結果として、世帯間格差が生じているという実態がある。しかし、多様化の程度が各世帯によってどう異なるか、そして格差はどのようなプロセスのもとで生じてきたのかについて、実証的に示した研究は少ない。

本研究では、アフリカ農民が生業を選択し、実践するプロセスを分析することで、現在農村で生じている世帯間格差の要因を明らかにすることを目的としている。そして、生業の多様化における世帯間格差の要因を明らかにすることは、「潜在能力」の拡大を規定する要因を検討することでもある。潜在能力とは、ある人が選択できる代替的な機能の集合と定義され、アフリカ農村部の貧困や脆弱性を考えていく上で重要な概念である。そのため、生業多様化の程度に差異が生じている背景を明らかにすることで、ある世帯ではどのように潜在能力の拡大が促進され、またある世帯では規定されてきたのか、ということが検討したい。

【研究の内容・方法】

本研究は、フィールドワークで得られたデータを主に使用する。調査地はアフリカ南部に位置するザンビア共和国、南部州ルシト行政区である。報告者は、同地区に集中調査村を2村選定し、2006年から調査を行っている。これまでの調査では、干ばつ常襲地域である調査地において、農業以外の様々な生計維持戦略が存在し、特に都市への移動労働が重要な役割を担っていることを明らかにしたうえで、移動労働の必要性・重要性には各世帯の生業活動へのアクセス性によって差異があることを指摘した。

本研究では、各世帯のこれまでの生業活動の変遷を明らかにし、生業へのアクセスとその変動を時間軸に位置づけて理解することで、上述したような世帯間の差異が、どのようにして形成されているのか(形成されてきたのか)を検討することとした。そのため、本研究では、ライフストーリー法を用いて農民たちの半生に関連づけながら生業の変遷の聞き取りを行った。対象は調査村全世帯主45名である。これまでの聞き取り調査や滞在中の観察から、各世帯の生業へのアクセスに影響している要因として、従来指摘されてきた財や資本という経済的要因のほかにも、①社会的な出来事(イベント)、②移動、③社会的ネットワーク、が考えられた。そこで特にこの3点に焦点をあてて、聞き取りを行うこととした。

【結論・考察】

調査の結果、各世帯主の半生のなかで、①イベント、②移動は「機会」や「契機」となってその後の彼らの生業活動に影響を与えていることが明らかになった。例えば、P.H氏(1969年生)は、現在、調査地でイスや机、ベッドなどを作る大工業を営んでいる。彼は、自分の技術について、1983年に首都ルサカの製粉所で働いていた兄を訪ねて行った時、家具などを作っている職人のところへ毎日通って作り方などを覚えていった、と話した。家具作りから得られる収入は、P.H氏と家族にとって貴重な現金収入源である。なおかつ、牛を所有していないP.H氏は大工業から得られる現金で、牛による耕起を頼むことが可能になった。

この事例のように、人びとは現金稼得だけのためではなく、様々な文脈で他の地域へ「移動」する。そのことが、新しい技術や知識の習得の「機会」となり、現在の農村での生活を支えるひとつの要因となっている。

上述した事例だけでなく他の事例においても、結婚や離婚などの社会的イベントや、都市への移動、またそれらを通じた新たな社会関係の創出は、人びとの生業へのアクセス性に変化を与える要因となっていた。日常的な出来事や社会関係が、経済活動と密接に関わる農村社会のなかで、人びとの「代替的な選択肢」は、財や資本以外にも様々な要因が絡み合い変動し、世帯間に差異を生み出している。その差異や格差の意味を現地の文脈に沿って理解するには、現地での長期的な観察が必要であると考えられる。